

2019（平成31／令和元）年度

長崎純心大学

自己点検・評価報告書

—「全学科男女共学」体制への

移行一年目を振り返る—

2021（令和3）年1月

目 次

はじめに ——2019年度自己点検・評価の方針——	1
第1章 【点検・評価項目①】 全学科男女共学への移行が決定されるに至ったプロセスはいかなるものであったか。また、その決定は大学内外に対しどのように伝えられ、周知されたか。	
(1) 説明 (2) 点検・評価	3
第2章 【点検・評価項目②】 2019年4月より男子学生数が増加することを見越して、設備面及びその他の面における事前の対応が適切に行われたか。	
(1) 説明 (2) 点検・評価	4
第3章 【点検・評価項目③】 全学科男女共学へ踏み切ったことにより、前年度までの状況にいかなる変化が生じたか。また、生じた変化のうち、特に何らかの対応や配慮が必要となるものがあれば、それに対する適切な対策が講じられているか。	
〔③-1〕 学生の受け入れ（入学者数等）に係る状況について	7
(1) 説明 (2) 点検・評価	
〔③-2〕 各学科に係る状況について	
ア 文化コミュニケーション学科	8
(1) 説明 (2) 点検・評価	
イ 地域包括支援学科	9
(1) 説明 (2) 点検・評価	
ウ こども教育保育学科	11
(1) 説明 (2) 点検・評価	
〔③-3〕 学生生活に係る状況について	15
(1) 説明 (2) 点検・評価	
〔③-4〕 学生たちの意識について	16
(1) アンケート調査結果報告 —入学年度別及び性別（女子学生／男子学生）に見る“長崎純心大学全学科男女共学化”の受けとめ方—	
(2) 考察	
おわりに ——今後の大学改善へ向けて——	26

はじめに —2019年度自己点検・評価の方針—

学校教育法第109条第1項に基づき、ここに、2019年度における長崎純心大学の状況について自ら点検及び評価を行った結果を報告する。

同法施行規則の第166条は、大学が自己点検・評価を行うにあたっては「同項の趣旨に即し適切な項目を設定する」ことを求めている。これについて本学においては、2019年度が全学科男女共学化という、女子教育に歴史的出自を有する大学としては極めて重要な意味をもつ転換の年であったことから、新体制の一年目を振り返り、この改革が所期の効果を挙げているかどうか、完全男女共学の大学への移行を成功裡に進めるうえでさらに検討すべきことがないかどうかを真摯に点検・評価することが、最も適切であると判断した。

そこで、2020年6月17日開催の点検評価運営委員会では、2019年度の自己点検・評価報告書に〈全学科男女共学体制への移行一年目を振り返る〉という表題を掲げるとともに、点検・評価の項目については、今回、大学基準協会等の大学評価機関が設定しているものとは独立に、本学固有の状況を鑑みて下記のように設定した。

【点検・評価項目①】 全学科男女共学への移行が決定されるに至ったプロセスはいかなるものであったか。また、その決定は大学内外に対しどのように伝えられ、周知されたか。

【点検・評価項目②】 2019年4月より男子学生数が増加することを見越して、設備面及びその他の面における事前の対応が適切に行われたか。

【点検・評価項目③】 全学科男女共学へ踏み切ったことにより、前年度までの状況にいかなる変化が生じたか。また、生じた変化のうち、特に何らかの対応や配慮が必要となるものがあれば、それに対する適切な対策が講じられているか。

* 次の4つの観点から記述。

〔③-1〕 学生の受け入れ（入学者数等）に係る状況について

〔③-2〕 各学科に係る状況について

〔③-3〕 学生生活に係る状況について

〔③-4〕 学生たちの意識について

前年（2018年）における学科の再編制と今回の「全学科男女共学化」は、ともに経営的・戦略的判断に基づく改革という面はあるにしても、決して、本学のそれ以前の歩みとその成果を否定したり、過去との決別・断絶を期したりするものでないことは、あらためて言うまでもない。むしろ、これらの改革は、「知恵のみちを歩み 人と世界に奉仕する」というモットーに集約される本学の恒久的な理想と、教育研究上の基本理念であるキリスト教的ヒューマンイズムの精神とをいっそう十全ならしめ、より充実したかたちで展開していく

ための契機となるべきものである。

ただし、そうしたポジティブな展望が根拠のあるものであることを社会に対し、また自らに対しても説得的に示すためには、改革後の実際の状況を注意深く点検した結果、それが全体として、以前の状況に比べ何らかの意味で「進化」していると実証できるのでなければならない。以下の本文がその証明に相当するものであればと願う次第である。

第1章 【点検・評価項目①】全学科男女共学への移行が決定されるに至ったプロセスはいかなるものであったか。また、その決定は大学内外に対しどのように伝えられ、周知されたか。

(1) 説明

今年度の「全学科男女共学化」に驚きを示した高等学校、メディア関係は少なくはなかったが、当事者としては、社会の状況を見ながら徐々に進めてきたという認識をもっていた。

1994年純心女子短期大学を改組して四年制大学を開設するにあたり、大学名称に「女子」を入れなかった。学部一期生の卒業に合わせて設置した大学院人文研究科人間文化専攻修士課程（博士前期課程）は男女共学であり、第一期入学者20名中4名が男性であった。

2000年には、わが国の急速な高齢社会への変化に対応するために4月1日より介護保険制度が発足し、福祉の分野で働く人材、つまりリーダーの養成が急務となった。そこで、福祉施設などや地域社会から男子学生の人材が欲しいとの要望や、学生生徒や保護者などから男子学生にも福祉に就職する道を開いて欲しいとの要請に応えるために現代福祉学科を男女共学とし、4名の男子学生が入学、翌年からは7名、13名とその数は増えていった。

2015年頃から県内の18歳人口は激減し、本学も入学定員を満たすことができなくなった。ここで全学科を男女共学とすることについて在学生の保護者を会員とする後援会と純心同窓会の総会及び理事会に諮り、積極的な賛同を得て実施に踏み切った次第である。

周知については、大学内へは、理事会、教授会、後援会、同窓会などでの説明を実施し、大学外へは、マスコミへのプレス発表をするとともにホームページに開示した。

(2) 点検・評価

全学科男女共学として初年度の2019年度の入学者数306名のうち67名が男子学生であった。全3学科それぞれに20数名が入学したことから、本学の全学科男女共学が学生、生徒、保護者、地域社会などより支持されたものと考えている。

以前は、男子学生は地域包括支援学科に10数名程度在籍するのみであったが、このたびの全学科共学化により、定員を満たす効果が得られた。

これからさらに18歳人口は減少していくものと予想されるが、今後も大学の魅力を高め発信し、男女を問わず理解していただき、期待に応える大学を目指して努力していきたい所存である。

第2章 【点検・評価項目②】 2019年4月より男子学生数が増加することを見越して、設備面及びその他の面における事前の対応が適切に行われたか。

(1) 説明

【設備面での事前対応】

2019年より男子学生が増加することを見通し、2018年度、バリアフリー化工事に付随して、トイレの改修工事を行った。それにより、L棟4階東側トイレを男子トイレへ変更し、4ブース増加。また、2019年の夏休みには、C棟1階女子トイレを男子トイレへ用途変更し、M棟2階男子トイレと併せて改修工事を行った。C棟1階男子更衣室には、棚を15人分以前より増やし、男子学生数の増加に対応した。

【その他の面での事前対応】

(教職員の事前研修)

2019年度からの全学科男女共学化に備え、学内の雰囲気これまでと変わるであろうことに対する教職員の心理的戸惑いや抵抗感、不安感などを軽減する目的で、2018年度のSD委員会では、夏に行う教員・職員共同SD研修会のテーマを〈新時代の長崎純心大学を創造する〉と設定したうえ、次の2つの内容を含む研修会を企画して、全教職員の参加を要請した。

- ① 女子大からの男女共学化を図り成功した先行事例を話していただける他大学の関係者を講師に招いての講演
- ② 本学において唯一、従前から男子学生を受け入れていた学科である、(旧)現代福祉学科の卒業生(男性)をゲストに招き、在学当時の思いを聴いたり、本学教員と壇上で対話したりするシンポジウム

当日の詳細は、以下のとおりである。

開催日時	平成30年8月20日(月) 午前の部 10時～12時／午後の部 13時～16時
参加者	本学教職員(実参加者数70名・参加者率80.5%) ほか 純心中・高ならびに幼稚園関係者(若干名) 鹿児島純心女子大学・鹿児島純心女子短期大学職員(7名)
プログラム	
〔午前の部〕	10:00 開会挨拶(学長) 10:05～11:30 事務局長および財務・教務・学生支援・キャリアの各課代表者による報告、質疑
〔午後の部〕	13:00 シンポジウムの趣旨説明 13:05～14:15 池田哲氏(聖カタリナ大学 会計課長(当時))による講演 「聖カタリナ大学男女共学における事例について」 ・聖カタリナ大学男女共学化(改組)の概要と結果 ・共学化にあたり準備したこと

・共学化後に発生した問題とその対処

14:15～14:30 質疑応答

(10分休憩)

14:40～16:00 シンポジウム「新時代の長崎純心大学を展望する」

【登壇者】

男性卒業生(シンポジスト)3名

小森祥平氏(平成16年3月卒業)

田尻大地氏(平成25年3月卒業)

庄村康斉氏(平成26年3月卒業)

本学教員(指定討論者)3名

畠山(文化コミュニケーション学科を代表して)

熊野(地域包括支援学科を代表して)

石田(こども教育保育学科を代表して)

コーディネーター(坂本)

16:00 閉会挨拶(学部長)

(2) 点検・評価

【設備面での事前対応】

これまでに行った男子学生増加に対する、トイレの増加・改修後の現状として、男子学生数とトイレの割合から見ても、今の男子トイレ設置数で充分足りていると実感した。実際、トイレが混み合う様子も見られなかった。今後の男子学生数の変化で、用途変更や改修工事を含め対応していく。また、それに付随して更衣室等の設備面も今後、随時対応していく。

【その他の面での事前対応】

(教職員の事前研修)

先行大学の経験に学びたいという趣旨の下、2004年度に全学的男女共学化を果たした聖カタリナ大学より会計課長池田哲様をゲストをお招きして実現した90分の講演においては、大変具体的かつ有益な示唆を数多く与えていただくことができ、参加者への事後アンケートの自由記述にも、そのことに対する感謝の言葉が多く記されていた(「良かったことのみならず、実際的な問題点や改善を迫られたことなどお話しいただき、大変参考になった」「男女共学における準備を計画的に進める必要性を感じた」「実務レベルのお話を、実例を多く入れてお話しいただき、今後の業務や課題がイメージできた」等)。

また、(旧)現代福祉学科の卒業生で、現在、福祉の専門職に就き社会で活躍中の男性3名をゲストに迎え、シンポジウムの形式で行った午後の部後半のプログラムにおいては、男子学生を迎える教職員側の対応として必要なのは過剰な世話焼きではなく、学生が男女問わず自分の居場所や活躍の場を自ら創造できるような環境や条件を整えることなのだ、と、あらためて気付かされた。また、卒業生の一人の口から語られた卒業生の「ネットワーク」構築への期待も、SNSの普及した今日、本学として大いに検討する価値のある提案であるといえよう。指定討論者として登壇した教員からは、男子学生のキャリア

支援の問題、男子学生向けの部活動のあり方、1・2年次アドバイザーを活用した一対一の相談体制などが、今後考えていくべき課題として指摘され、事後アンケートの自由記述にも、卒業生の成長を目の当たりにできた喜びとともに、同趣旨の意見が記されていた。

以上のことから、翌年に全学科男女共学化を控えた本学の事前対応として、このようなSD研修の機会が持たれたことは正に時宜にかなったことであり、必要なことでもあったと評価できる(2019年3月発行 長崎純心大学教育開発委員会編「FD Newsletter 第7号」の掲載記事「2018(平成30)年度第1回SD研修会報告」を参照)。

第3章 【点検・評価項目③】全学科男女共学へ踏み切ったことにより、前年度までの状況にいかなる変化が生じたか。また、生じた変化のうち、特に何らかの対応や配慮が必要となるものがあれば、それに対する適切な対策が講じられているか。

〔③－1〕 学生の受け入れ（入学者数等）に係る状況について

（1）説明

2018年度以前の4年間においては、入学定員を充足することができなかった。2019年度入試より全学科男女共学化とし、さらに、最も収容定員率の低い地域包括支援学科の入学定員を、120名から100名へと減員し募集を行った。その結果、学部の入学定員280名に対し、前年比121.4%の306名の入学者を獲得することができた。2019年度入学者の男女の内訳は、男子67名、女子239名で男子の占有率は21.8%となった。

（2）点検・評価

全学科男女共学化により、2019年度は学部入学定員を充足することができた。2018年度入学者の男女の内訳は、男子15名、女子237名であったことから、全学科男女共学化により、ほぼ男子の入学者の増加分が全入学者の増加となった。

しかし、学科別の定員充足率を見ると、文化コミュニケーション学科が106%、地域包括支援学科が89%、こども教育保育学科が132%と大きく差が出る結果となった。特に、地域包括支援学科は、3学科で唯一定員充足率100%を満たすことができなかった。

まず、今後の喫緊の課題は、学部での定員充足に加え、すべての学科の定員充足率を100%以上にし、早期に収容定員を充足させることである。

次に、男女共学化により一定数の男子の入学者は確保できたが、2018年度から2019年度の女子の入学者は2名増に止まっており、共学化したことによる女子の入学者数の変化は見られない。女子の入学者数を増やす方策も引き続き検討していかなければならない。

加えて、今後少子化が加速していくなか、入学者の県内占有率が90%を超える本学は、県外からの入学者の取り込みが課題となる。

最後に、これまで実績のない文化コミュニケーション学科やこども教育保育学科、および地域包括支援学科の心理学分野の男子学生の就職先の開拓や、それに関わる国家試験や採用試験等のサポート体制の充実、強化が重要であることは言うまでもない。

〔③－２〕 各学科に係る状況について

ア 文化コミュニケーション学科

(1) 説明

- 1) 文化コミュニケーション学科(定員80名)では2019年度21名、(参考2020年度入学生18名)の男子学生が入学した。定員比で25%程度の一定数が入学したことで、男子学生も、学修、学生生活において十分に能力を発揮できているように思われる。
- 2) 2019年度、新入生のオリエンテーションキャンプの際に、グループ分けは部屋割りと重なるので、当然、男子学生と女子学生に分かれたが、一日目の行事終了後も問題行動はなかった。
- 3) 男子学生が入学したことで、学科内の雰囲気が明るくなったという声が上がっている。授業中などでも、積極的に発言する男子学生がいるために、女子学生にも良い影響がみられるようである。
- 4) 特に、英語科目など、教員とのコミュニケーションが重視される科目では、印象ではあるが、一般的に男子学生の方が積極的に会話に参加しようとする傾向がみられた。
- 5) 問題点としては、一部の男子学生に、提出物などの提出期限が守れなかったりする場合もあるが、男子学生というカテゴリーで判断すべきではなく、性別にかかわりのない、個人の問題として把握すべきであるという意見も学科内にあった。

参考) 資格免許関係では、2020年度、2年生の国語科教員免許関連科目では7名中4名が男子学生であり、女子学生とも協力しながら学習を行っている。将来的に教員を目指すときに公立学校は共学である場合が大きいので、模擬授業等でも男女共学化が有効に働いている。その他の免許資格でも、取得を目指す男子学生は概ね、熱心に学修している。

(2) 点検・評価

- 1) 男子学生が入学することで、入学定員の確保が容易になるとともに、入学後の学修環境の改善にもつながっていると思われる。今後ともこの方針を堅持するとともに、さらなる学修環境の改善が必要となる。
- 2) 免許資格取得と関連して、女子学生の就職傾向と男子学生の就職志望傾向を比較して、新たな就職市場の開拓が必要であれば、学内における対策講座なども含めて、早急に対策を講じる必要がある。
- 3) 特に、一般企業への就職希望が増えた場合に、企業が求める大卒男子学生像と本学科のディプロマポリシーとの間に緊密な関係性が認められるかの点検は必要になるだろう。

- 3) 今後、毎年25%程度の男子学生が入学すると、学科内の雰囲気も変化していくと考えられる。男子教育、女子教育と分ける必要はないが、教員の側に男子学生への対応と女子学生の対応に、違いが生まれてくる可能性はある。公平の原則を守りながら、どう対応するかの合意は必要になるかもしれない。
- 4) 施設面において、特に男子学生からの不満はないが、4学年すべてに男子学生が在籍することになる3年後へ向けて、学生更衣室等の整備も必要だと思われる。
- 5) 図書館の蔵書も、専門書には男女の興味の区別は少ないが、一般図書や雑誌類には、男女間の興味の偏りが存在するのも事実であろう。2020年度には男子学生に特化した選書企画も実施されたが、学科内においても、こうした視点からの企画等は必要となるだろう。

○

イ 地域包括支援学科

(1) 説明

- 1) 地域包括支援学科では、これまでも男子学生を入学させていたので、特段の変化は感じられなかった。
- 2) 現代福祉学科のみで男子学生を受け入れていた時期に比べ、男女共学化により男子学生の数が増加した。男子学生数をみると4年生(2016年度生)は9名、3年生(2017年度生)は2名、2年生(2018年度生)は11名に比べ、完全男女共学化の現1年生(2019年度生)は20名となっている。そのため、すでに男子学生の受け入れを行っていた地域包括支援学科においても、全学科男女共学化は男子学生の入学において、非常に効果があったことがうかがえる。
- 3) 新入生のオリエンテーションキャンプの際に、グループ分けをどうするかを検討した。(動画作成のグループワークをプログラムに取り入れたので、その課題実施のためには部屋ごとのグループの方が良いであろうという考えで、男女別のグループにした)
- 4) 地域包括支援学科の学生は、卒業時に資格取得を希望するので、演習や実習の科目を履修している。その中の一つに「相談援助演習Ⅰ」があるが、これは1クラス20名以内と定められているため、少人数(18名程度)に分け、さらにグループワークや学外活動等を含めながら授業を行なった。そのクラスは、コースや男女を分散させて編成したが、男子学生が多かったこともあり、演習や学外活動においては活気があった。
- 5) 男子学生が増えたことによって、福祉系の学外活動、特に街頭での市民に対する児童虐待防止啓発活動や歳末助け合い募金活動、特別支援学級の生徒との交流活動が活気づいた。具体的には、大きな声での啓発、募金の呼びかけやお願い、障害児との積極的な関わり、体を使ったダイナミックな関わり等が見られた。

これらの変化により、市民の方々や特別支援学級の生徒との交流が促進され、また男子学生だけではなく、女子学生の主体的な活動の発現にもつながった。

- 6) 担当する1年次後期科目の「心理学実験」では、男子学生がまとまって着席していた。
男子学生が増加し、卒業論文のデータ収集において、男性データが以前よりも集めやすくなった。
- 7) 男子学生が加わった場合でも、出席を取る際には、全員を「さん」づけで呼んでいる。近い距離で雑談をするときなどは、自然に「くん」になることはあるが、公的な場面では「さん」に統一することにした。見た目や名前だけでは性別がよくわからないこともあり、LGBTなどへの配慮も必要と考えられるので、安全策としてということである。
- 8) 授業の空き時間、昼休み、放課後等に男子が集まって、サッカー、バレー、バスケットをそれぞれ相応の人数を集めてプレイする頻度が増えた。(但し、体育館内でのサッカー行為は禁止)
- 9) これまでのところ、施設設備に関して男子学生たちから特段の要望はない。

(2) 点検・評価

- 1) 地域包括支援学科でのみ男子学生を受け入れ、その数が少なかった時に比べ、男子学生・女子学生とものびのびと学生生活が送れているようで、全学科男女共学体制への移行は、「妥当」であったと思われる。
- 2) 本学科の場合、全学科共学体制移行の1年前に、人間心理学科を含む地域包括支援学科という学科改変が行われていたので、段階的な共学化のような流れで進み、急激な環境の変化を避けられたと思っている。
- 3) 全学科男女共学化により学生数が増加したことは、学生数の確保ばかりではなく、福祉、心理系の学びをし、将来、その領域で働く人材を確保できる可能性が広がったことも意味し、「適切」と言えるのではないだろうか。特に、県立の普通科進学校からの男子学生の入学者が多いように思われる。そのことは、本学科にとって学生の基礎学力を高めることにもつながり、ひいては社会福祉専門職養成における質の向上にもつながるのではないかと考えられる。
今後はいかにして男女を問わず、福祉人材の確保、すなわち、専門職養成につなぐことができるかが課題となる。
- 4) ソーシャルワークコース、地域包括ケアコースにおいては、社会福祉への学問的な興味関心が資格取得への意欲に直結することとなるため、福祉専門職養成の立場から、いかにして学生の学問的なモチベーションを醸成するように関わっていくかが問われると考えられる。
- 5) グループワークや学外活動において、地域包括ケアコース（介護）やソーシャルワークコースなど、視点が異なる学生が男女の別なくともに学びを深めるという点では「適切」だったと考えている。しかし、1年次で学生

個々の状況を十分に把握出来ない状態でクラス編成を行なったため、グループ作業での発言が少ないなど課題がある。

- 6) 学生活動の広がりや充実、施設・設備、およびクラブ顧問などの問題が今後予想される。
- 7) 今後、男子学生が増えることを考えたとき、こちら側が見ている更衣室の充実（出入口、エアコン、仕切り、清掃やごみ対策）の必要性を感じる。
- 8) 放課後のクラブ活動等のためのバイク・車の駐車場の確保と、駐車および車の移動システムの明確化が必要である。
理由：①大学駐車場が 19:00 までなので、S 棟裏駐車場等を使うにしても、場所と時間、およびその手続きを明確にし、学生に安心して使用させる。
②車を所定の場所に置くことによって、地域等に迷惑をかけない。
③放課後の各活動終了後、下校時間（20:45）までに、遅れることなく速やかに帰ることができるようにする。
- 9) 男子学生の増加に伴って全学的に運動施設の利用は増したが、禁止されている体育館内でのサッカー行為や運動用具の後片付けの不備など、今後の指導が課題となる。

○

ウ こども教育保育学科

(1) 説明

- 1) こども教育保育学科では、2019 年度に男子学生を受け入れた結果、入学者数が合計 132 名（内、男子学生 26 名）という結果となった。2017 年度入学生は 88 名、2018 年度入学生は 92 名であったことと照らし合わせて考えると、学生の入学者数は、大幅に増加したといえる。
- 2) 2019 年度の男子 26 人中、25 人が小学校教員希望であり、小学校教員としての就職を入学段階において意識している者が多いことがうかがわれる。
- 3) 2019 年 4 月に実施したフレッシュマンキャンプ時に、男子学生に対してアンケート調査結果で、本学科に入学したことに対して、「とても楽しみ」「少し楽しみ」「少し不安」「とても不安」のうち、どの気持ちに近いかを尋ねたところ、「とても楽しみ」「少し楽しみ」を合わせた人数が 18 人（全体 69.2%）であり、入学を前向き、概ね肯定的にとらえていることが、うかがわれる。
- 4) これまでの学生に対するキャリア指導では、小学校教員免許状を目指す場合には、幼稚園教員免許状、保育士資格の取得も目指すことを課していた。それは学科の成績要件に満たないため小学校教員免許が取得できない場合に備えてのキャリア指導という意味があった。しかし、男子学生はキャリアに対する志向性がこれまでとは異なることから、2019 年度よりこの方針をなくし、取得する免許・資格については各自の自由とした。

- 5) 男子学生に限ったことではないが、小学校実習に行くための条件として、2年次後期の成績が出た段階でのGPAが2.5、幼稚園実習に行くためには1年次後期の成績が出た段階でのGPAが2.0等の条件もあることから、学生の中にはGPAが高くなりそうな授業の取り方を「賢く」行う者も出てきており、それが本当の意味での個々の学生の成長につながるのか、といった指摘が教員間から出ている。
- 6) 男子学生の授業への参加という点については、例えば教材作成の課題において、女子には、あまり見られなかった側面、「思いきって作る」「独自のものを作成する」というプラス面が見られる。そのことが、女子学生に、「こういう風に作ってもいいんだ」「自分もやってみよう」という、気持ちを生じさせ、積極的に取り組もうとする行動を促している。また、「ソフォモアセミナー」の「芋ほり」「清掃活動」などの取り組みに対して、男子学生の中には、得意とする者、積極的に取り組もうとする者、リーダーシップをとる者がかなりおり、男子学生の、こうした活躍は、女子にプラス面での刺激を与えている。さらに、男子学生がピアノを頑張っている姿を見て、「自分も頑張ろうと思った」女子学生がいることから、男子学生の努力が、女子学生にもプラスの影響を与えていることが、うかがわれる。
- 7) 保育に関する授業において、男子学生は小学校教諭をほとんどが目指していることから、幼児教育に関することに、担当者の目にはあまり興味がないように見受けられ、担当教員の中には学生の学びのモチベーションを高めることに苦慮する者もいる。GPAに関わる科目のため、真剣には取り組んでいる。
- 8) 知識が問われる科目の筆記試験において、「勉強の仕方がわからない」との思いを持つ、男子学生が、かなりみられ、初回のテストにおいて良い点数がとれなかった者が多い。
- 9) 「騒がしくなった」「ごみの放置が多くなった」「体育館を予約無しに使っている」「ピアノ室の使い方がよくない(ドアを開けっぱなしでの大声の会話、飲食、電気や窓の不始末等)」など、男子学生のマナーの面での問題がうかがえる(4年生女子学生への聞き取り)。
- 10) 「男女がふわふわ浮ついていて節度がない(バスの中でいちゃつく)」という、男女間のマナーを問題視する学生がいる(4年生女子学生への聞き取り)。
- 11) 「男子トイレが2、3階になく、不便」「J棟横の運動場で、サッカーなどの運動ができるようにしてほしい」「体育館のバスケットコートが、正規の広いコートとして使えるように、ゴールのボードを降ろしてほしい」「歯磨きなどができるように、洗面所が欲しい」など、施設、設備面での要望がみられる(1年生男子学生への聞き取り)。また、「クラス外の人がまだほとんど分からない。今からでもいいので、フレッシュマンキャンプのような交流イベントを開いてほしい」との、行事開催への要望がみられる((1年生男子学生への聞き取り)。
- 12) 「野球部が新しくできて、サークルの充実という点からは良いと思う」という評価が学生自身からなされている(4年生女子学生への聞き取り)。

(2) 点検・評価

- 1) こども教育保育学科では、2019 年度に男子学生を受け入れた結果、前年度と比べて、40 名の増加となり、大学の入学者増の目的と照らせ合わせるならば、大きな効果があったといえる。
- 2) 子どもの保育、教育という観点から見た場合、男性保育者の存在は、保育の幅を広げる可能性があり、男子学生の受け入れにより、その養成が本学科で可能になったというとは、保育者養成の新たな地平線を開拓できるという意味で評価できる。
- 3) 特に、実践的な取り組みが求められる授業において、男子学生の中には特長（積極性やリーダーシップ等）を発揮する者が相当数おり、授業の質を向上させている。また、そのことが、女子学生に対しても、授業に対する主体的な取り組みを促し、良い影響を与えている。
- 4) 2019 年度入学した男子生徒 26 名のうち、多くが小学校教員を目指している。現行のルールでは 2 年次末の成績までの GPA が基準を満たさないと小学校実習に行くことができず、結果として免許状の取得ができないので、そのような学生のキャリア指導をどのようにしていくかが大きな課題となっている。本学科のアドバイザーが中心となり、個々の男子学生の希望に耳を傾けながら、より丁寧にキャリア指導を行っていくことや、キャリア支援室との連携を、さらに緊密にしていくことが求められている。また、保育士資格をいかした、保育所以外のキャリアの道（例えば児童養護移設、児童自立支援施設等での就職）の開拓も考えられる。2020 年度より児童福祉の専門家を本学科として迎えることができ、男子学生に対して、こうしたキャリアまでの道を示していくことが望まれている。こうした状況のもと、児童福祉の専門の教員が、キャリア委員会のメンバーとなり、実際にキャリアオリエンテーション等で説明を行った点は評価できる。さらに、2020 年度より、キャリア支援室に男子学生の就職に詳しいスタッフが来てくださったので、本学科男子生徒のキャリアに有益な情報をいただけることが期待される。将来のことで不安を感じる学生のためにも、学生相談室のカウンセラーの紹介、連携を、アドバイザーが中心となりながら、学科として進めていきたい。また、根本的に、GPA を中心としたスクリーニングについて見直すならば、それは入試体制、指導体制、キャリア指導体制の一連の大学のあり方を再検討することになる。社会の状況、学生の状況等をふまえ、こうした改革を前提とした話し合いが必要か否かについても、見極めていくことが求められる。
- 5) 男子学生を含め、GPA を上げることにのみ学生の関心が集中してしまい、「点数を上げるため」だけの「勉強」になってしまっているという懸念があるので、個々人を本当の意味で高めていく豊かな学びにつながるような取り組みができないかを、学科会でも考えていきたい。
- 6) 知識を求められる科目についての「勉強の仕方」について、科目担当者に積極的に聞くことができる姿勢の大切さについて、教務のオリエンテーションや初年次教育などの機会に伝えていく。
- 7) こどもの保育の充実は、その後の小学校以降の豊かな学びにつながる基礎になるということを丁寧に、学生に対して説明し、保育関連の授業を受けるモチベーションを高めるとともに、その重要性を学生に認識させる。教務オリエンテーションや、アドバイザーとの面談等の機会などが考えられ

る。

- 8) 現在、こども教育保育学科所属の教員数は 16 名であり、学生定員数 90 名のときであった 19 名 (2014 年度) より下回っている (2017 年より 16 名)。こども教育保育学科の教育の質を維持していくためには、教員数は重要な要素である。特に「幼稚園教育実習指導」や「保育所実習指導」「ソフオモアセミナー」「総合演習」等、複数の教員担当者の配置でグループを少人数にすることにより、個々の学生に課題を出し、きめ細かく対応してきた経緯があり、今後も、こうした教育形態のよって、教育の質を可能な限り維持したいので、しかるべき大学の部局に対して教員増を求めている。
- 9) 男子学生のなかで、施設、設備をぞんざいに扱う者がいることから、大切に使用するよう指導することが求められる。本学科が保育、教育での指導者を養成しているミッションから関連付けて、保育者、教育者の心得の重要性、共通性と合わせて指導していくなど、工夫していきたい。1 年次での基礎科目である「フレッシュマンセミナー」、2 年次の「ソフオモアセミナー」の授業や、アドバイザーとの面談などの機会を担当者とともに考えていきたい。
- 10) 初年次教育の機会を利用し、男子学生、女子学生が、お互いに異性を尊重していく心、生命を大切にしていこう姿勢を養っていくことができるような話をする。
- 11) スポーツの充実を含めた生活面での拡充を求め、大学の施設・設備面でアイデアが寄せられている。また、学生同士がより交流を図りたいとの希望から、サークルや行事開催等についての評価や要望が、学生よりなされている。このような声は、学生が大学生活を充実させていきたいとの願いであり、真摯に受けとめ、今後、施設課等の関連部局とも連絡、連携をとりながら、より詳細にアンケート調査をして、要望を把握することを検討する。また、学科として何かできないかを、他学科とも連携しながら、考えていく。

〔③－３〕 学生生活に係る状況について

（１）説明

（学生の課外活動）

2018年度の活動中のクラブは体育会系7団体、文化系12団体、ボランティア系6団体、同好会は6団体である（2018年度校務分掌 p.20）。2019年度の活動中クラブは体育系6団体、文化系12団体、ボランティア系6団体、同好会は2団体である（2019年度校務分掌 p.21）。全学科男女共学になったことにより、クラブ等団体数に変化は見られない。

2018年度学生会は13名（うち男子0）、純心祭実行委員会は25名（うち男子1）だった。2019年度学生会は15名（うち男子0）、純心祭実行委員会は25名（うち男子2名）だった。全学科男女共学になったことにより、学生会及び純心祭実行委員会の男女の構成に変化は見られない。

（その他）

公共交通機関以外の通学者のうち、自家用車は2018年度271名（うち男子3）、バイクは31名（うち男子5）であった。2019年度になると自家用車は291名（うち男子19）、バイクは31名（うち男子14）だった。全学科男女共学による影響で公共交通機関以外の利用者が増加したと考えられる。

（２）点検・評価

2020年度純心祭実行委員会30名のうち、男子が7名選出されている。学生が主体的に活動する組織に男子の参加が増加している。

〔③－４〕 学生たちの意識について

(1) アンケート調査結果報告 —入学年度別及び性別に見る

“長崎純心大学全学科男女共学化”の受けとめ方—

※ 調査概要

実施時期： 2020年10月13日(火)～10月23日(金)

調査方法： GoogleフォームによるWebアンケート

対象： 学部全学年

回答者数(回答率)： 全体 409名(全学部生の35.8%が回答)

→ 女性 362名(88.5% 女性全体の36.7%が回答)

→ 男性 47名(11.5% 男性全体の30.5%が回答)

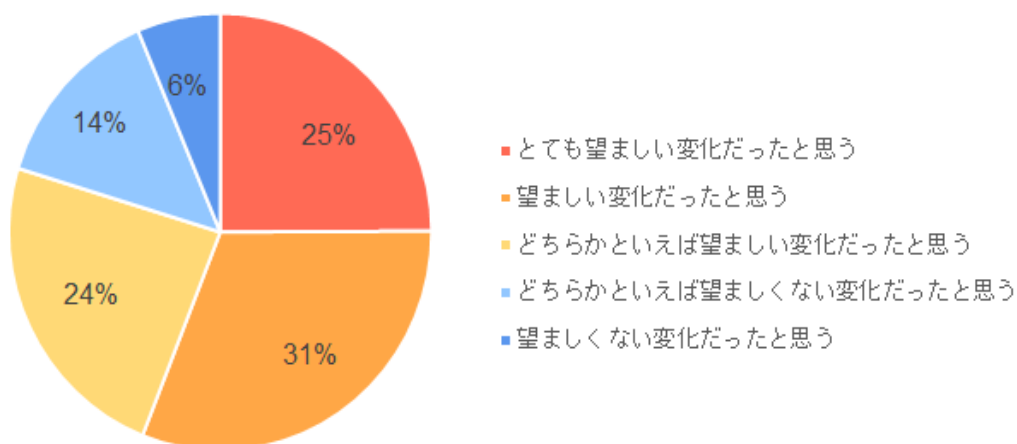
回答者数の内訳：

	2018年度もしくはそれ以前の入学		2019年度入学		2020年度入学	
	女性	男性	女性	男性	女性	男性
比較文化学科	13					
人間心理学科	14	1				
英語情報学科	13		1			
文化コミュニケーション学科	30		18	3	35	9
地域包括支援学科	35	3	24	2	35	10
こども教育保育学科	53		39	7	52	12
小計	158	4	82	12	122	31
合計	162		94		153	

《集計結果》

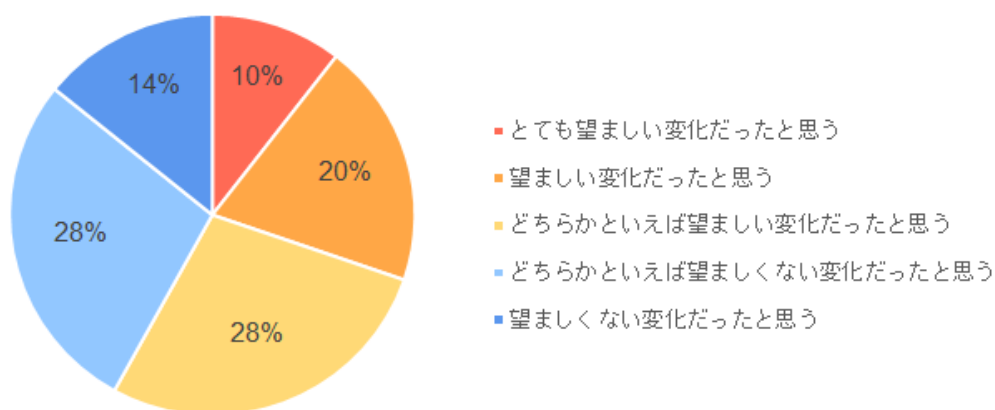
1. 【Q. 1→】本学の「全学科男女共学化」に対する評価

(1) 全体

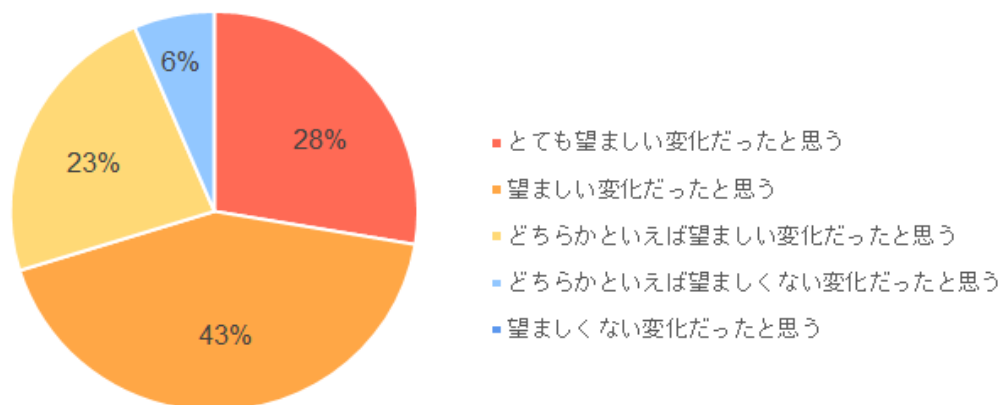


(2) 入学年度別

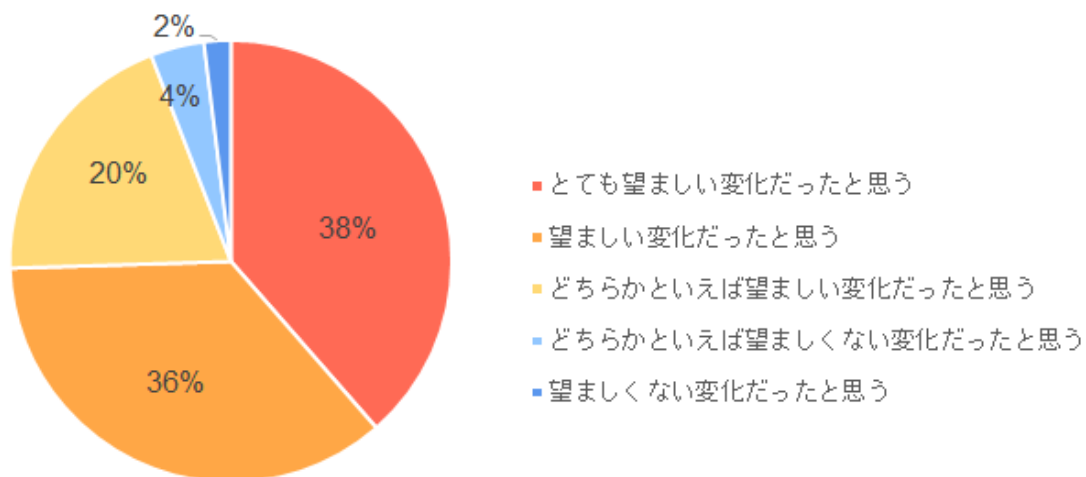
①2018年度またはそれ以前(=「全学科男女共学化」する前の入学者)



②2019年度(=「全学科男女共学化」初年度の入学者)

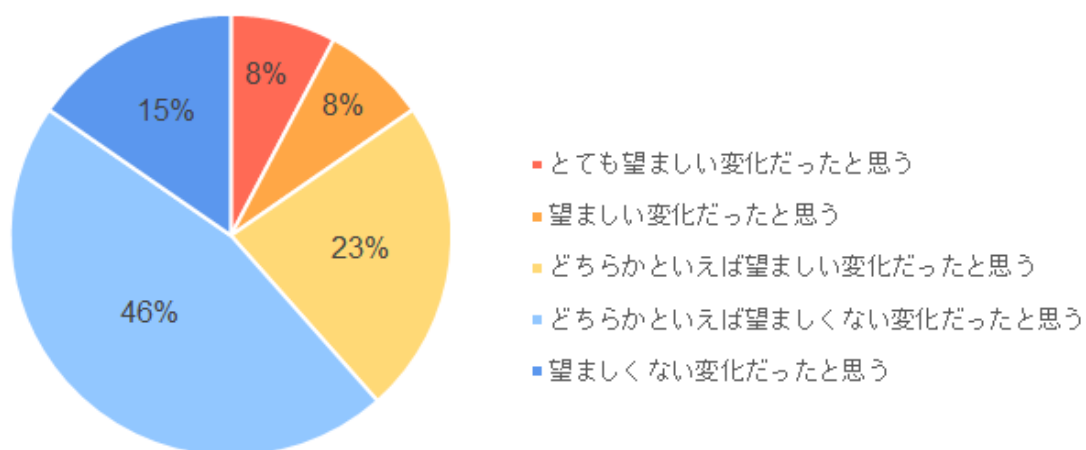


③2020年度(=「全学科男女共学化」して2年目の入学者)

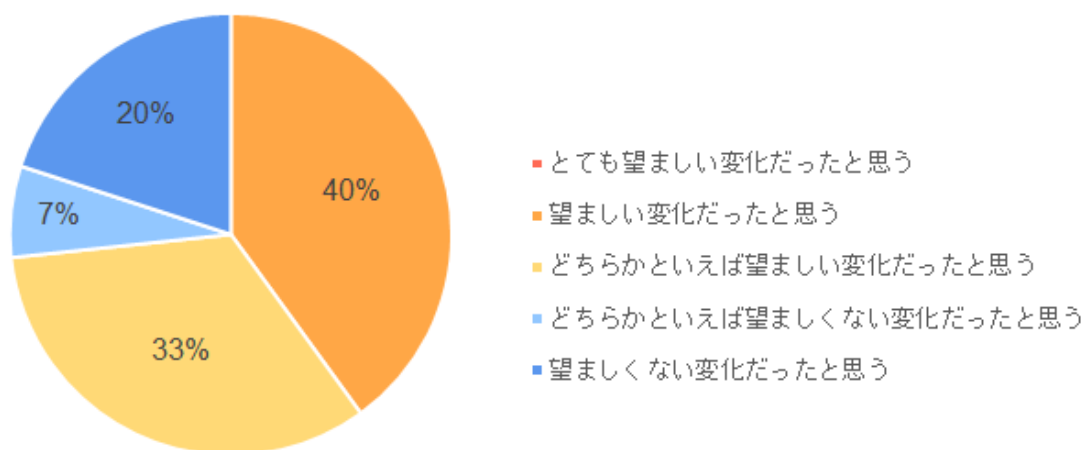


(3) 所属学科別

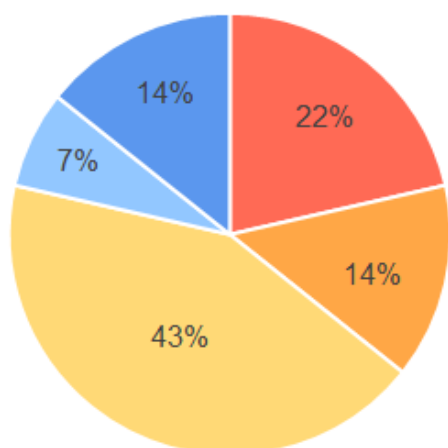
①比較文化学科(4年生)



②人間心理学科(4年生)

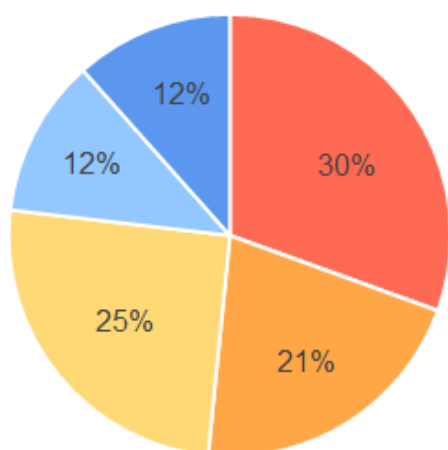


③英語情報学科(4年生)



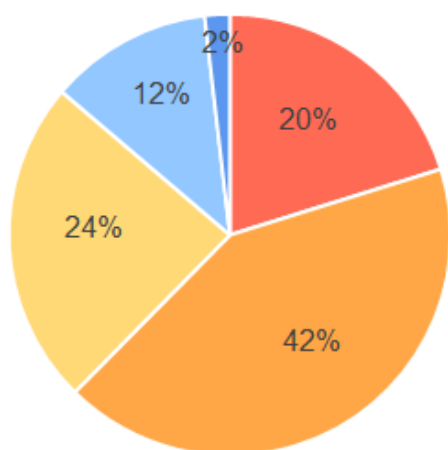
- とても望ましい変化だったと思う
- 望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましくない変化だったと思う
- 望ましくない変化だったと思う

④文化コミュニケーション学科(1・2・3年生)



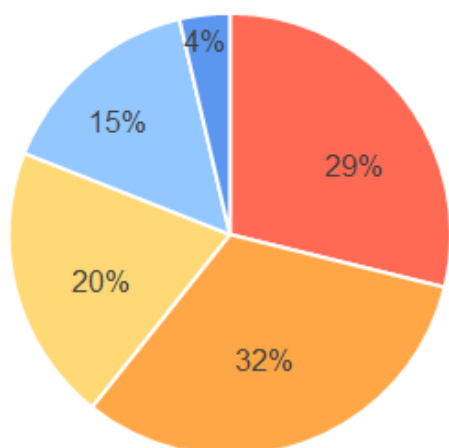
- とても望ましい変化だったと思う
- 望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましくない変化だったと思う
- 望ましくない変化だったと思う

⑤地域包括支援学科(全学年)



- とても望ましい変化だったと思う
- 望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましくない変化だったと思う
- 望ましくない変化だったと思う

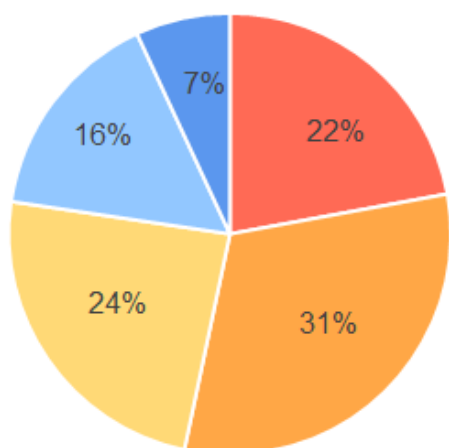
⑥こども教育保育学科(全学年)



- とても望ましい変化だったと思う
- 望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましくない変化だったと思う
- 望ましくない変化だったと思う

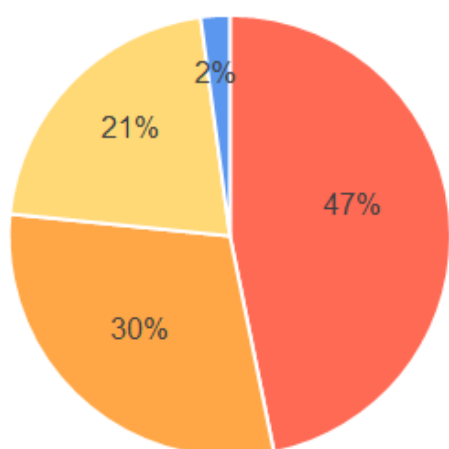
(4)性別

①女子学生



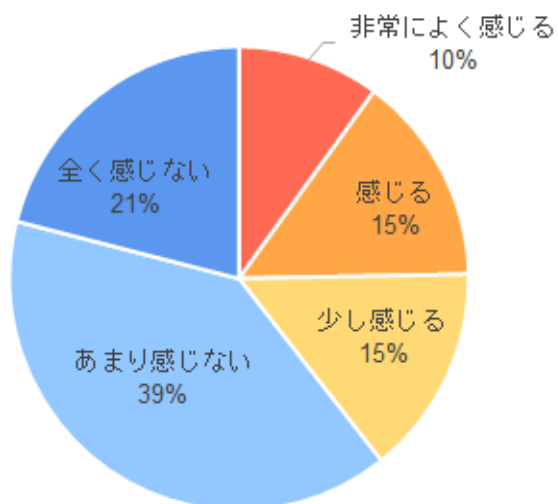
- とても望ましい変化だったと思う
- 望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましくない変化だったと思う
- 望ましくない変化だったと思う

②男子学生

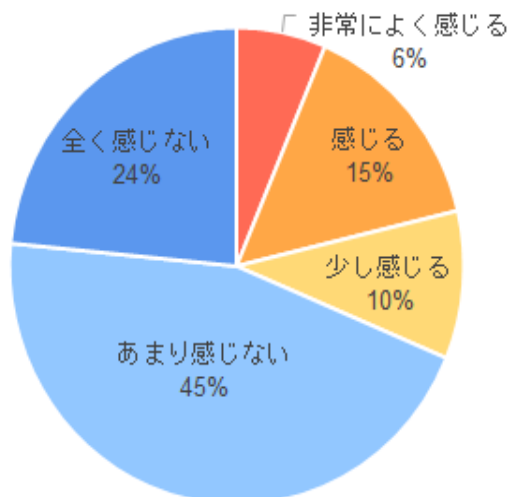


- とても望ましい変化だったと思う
- 望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましい変化だったと思う
- どちらかといえば望ましくない変化だったと思う
- 望ましくない変化だったと思う

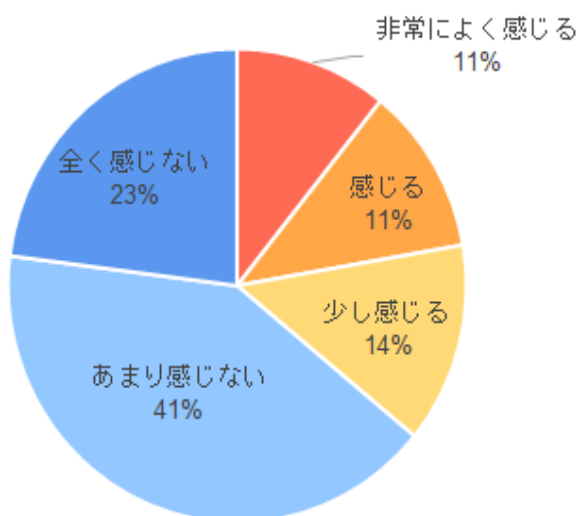
2. 【Q. 3→】異性の学生と場を共にすることによる気づまり・困り感等の有無
[場面①]通学時のバスの中やバス停



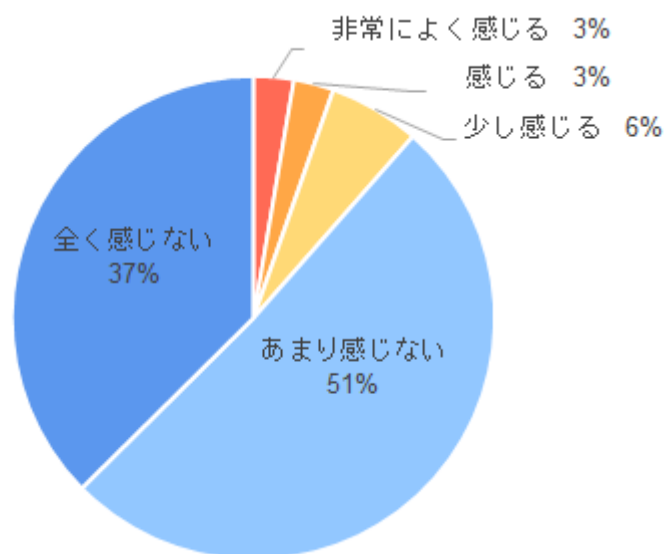
[場面②]授業中の教室(体育館等の特別室を含む)



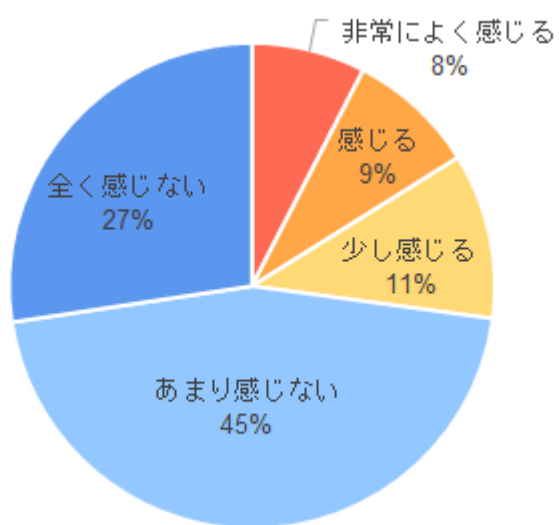
[画面③]カフェテリア、学食、売店



[場面④]図書館

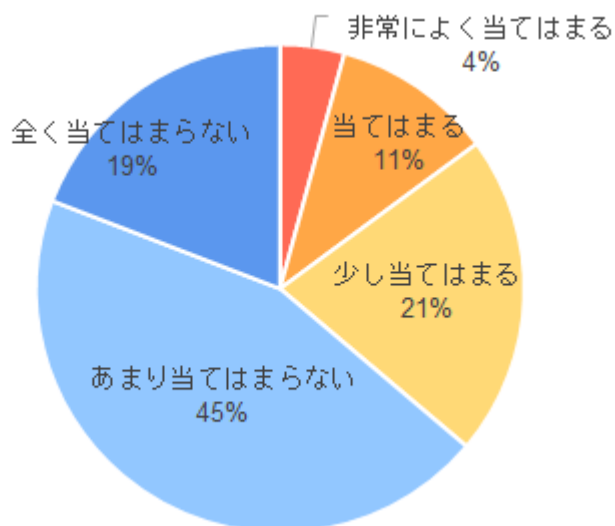


[場面⑤]キャンパス内の、上記①～④以外の場所

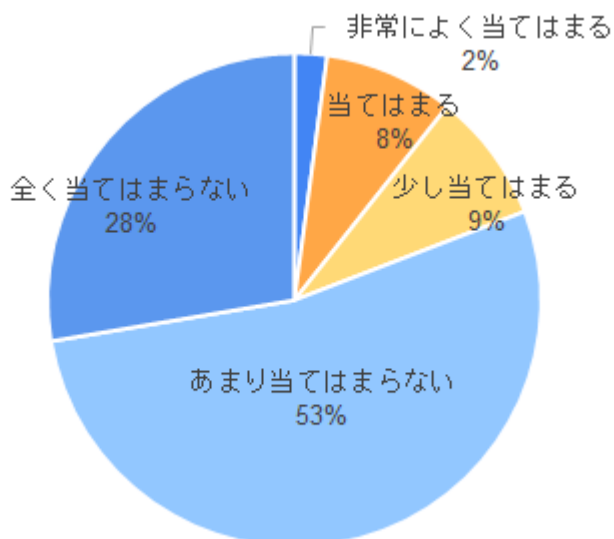


3. 【Q. 4(男子学生のみへの質問)→】女子の比率が高い(現況では)大学に身を置いていることを背景として男子学生に生じうるかもしれないと懸念される経験の有無

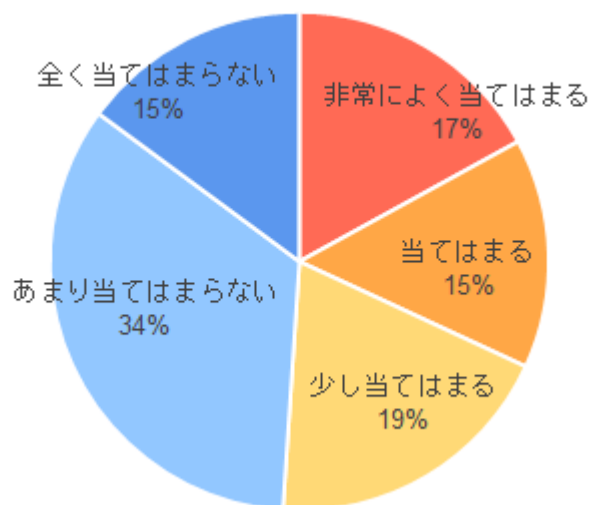
(1)「学内では、女子の多い環境の中で、居心地の悪さを感じるがよくある(入学当初だけでなく今も)」かどうか



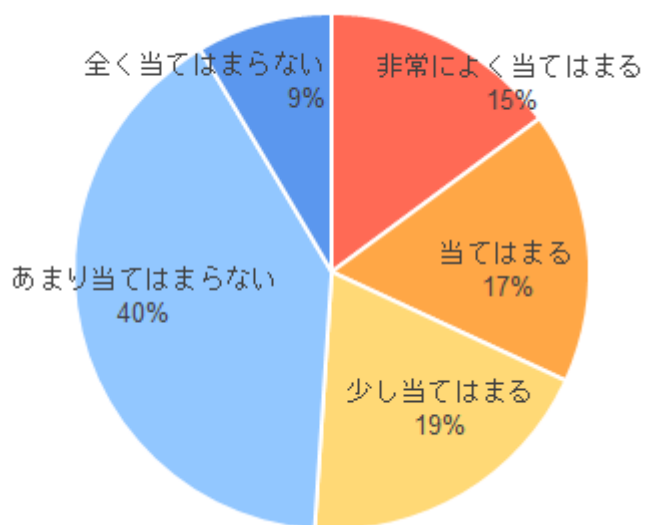
(2)「教員や職員の一部に、男子学生への理解が足りない(あるいは、対応が適切ではない)のではないかと思う人がいる」かどうか



(3)「『純心は女子の学校』のイメージを強く持つ学外の人から、純心の学生であることを珍しがられたことがある」かどうか



(4)「学内の施設・設備や環境の面で、女性ならよいが男性には不便または不向きだと感じるものがある」かどうか



4. 自由記述

*データの量が膨大なため、自由記述による回答は別添の資料に一括掲載する。

(2) 考察

「全学科男女共学化」に対する学生の評価においては、「望ましくない変化」と捉えている学生は全体として 20%であった。一方、共学前と共学後の入学生の割合を比較してみると、共学前の入学生は「望ましくない変化」と捉えている学生は 42%。共学後（2019 年・2020 年度）の入学生は「望ましくない変化」と捉えている割合が 6%と、共学前と共学後の学生の受け止め方に大きな違いが見られた。

学科別では、特に比較文化学科の学生に「望ましくない変化」と捉える学生が多く見られ、地域包括支援学科では他学科より「望ましい変化」と肯定的に捉えている学生が多く見られた。

「異性の学生と場を共にすることへの気づまり・困り感」については、特に通学時のバスにおいて、相席をためらってしまう等の意見が多くみられ、お互い密接した状態になることへの気づまり感を感じている学生が多く見られた。また男子学生に対しては、声大きい、うるさいと感じている女子学生の意見が多くみられた。一方、男子学生においては、女性が多すぎて視線をどこに向けてよいか戸惑ってしまうなど、女性の多さに困惑している様子が見られた。

本学が全学共学化に切り替わり 2 年が経過したところであるが、まだまだ社会への周知には至っていないようである。特に、男子学生の約半数以上が、純心の学生であることを珍しがられたり、驚かれたりされたとの回答が多く見られた事からも推察される。

「本学が男女共学の大学として今後発展していく為の重要な事は何か」との問いに対し、学生からは、「人との交流ができる授業展開」また「よりスムーズな人間関係を作り」「男女が話すきっかけとなるような授業展開や文化祭のようなイベント作り」また「部活・サークルなどの充実」等々の回答が見られた。

共学化 2 年目においては、まだまだ男女の関わりにおいて個人差が大きく感じられるが、今後、大学の環境作りにおいては、共学化を意識した人間関係作りに重点を置いた環境作りの重要性を感じた。

おわりに ー今後の大学改善へ向けてー

2019年度は、女子教育を使命として創立された学校法人純心女子学園の一機関である本学が全学科男女共学に踏み切り、3学科ともに男子学生の入学者を迎え入れたことから、点検評価運営委員会は自己点検・評価の目的を〈「全学科男女共学」体制への移行一年目を振り返る〉とした。

自己点検・評価委員会は、今回の自己点検・評価の対象とする事項を、1、全学科男女共学化決定までのプロセスについて、2、男子学生の増加を見越して、設備面その他の事前の対応は適切であったか、3、実施後の状況を前年度までの状況と比較し評価する という3点に整理し、その結果を第1～3章において提示した。

結果についてみると、第3章において指摘されているように、学部の入学定員280名に対し、前年比121.4%の306名の入学者を獲得、その内訳は男子67名、女子239名で男子の占有率は21.8%、しかも全3学科にそれぞれに20数名の男子学生を迎えることができ、入学定員を満たすことができた。自己点検・評価委員会とIR委員会が共同で実施した学生へのアンケートの結果をみると、概ね、全学科で望ましい結果であったと肯定的に捉えられている。

今後の課題としては、3年計画で進めている施設の整備などを完成させ、男子学生のキャンパスライフを充実させること、男子学生の就職先の確保がある。全学生が切磋琢磨し、志した資格と技術をもって新しい就職の場を開拓し、「人と世界に奉仕する」道を進めるよう、学生たちの希望に耳を傾け、可能な限りの改善を進めたい。

このたびの点検・評価において、結果をできるかぎり数値をもって示し、考察したことで、これからの対応を考える指針が与えられたものと評価できる。また、アンケート調査の自由記述回答のデータも分類のうえで運営委員会に提供され、学長以下執行部の共有するところとなったことは、今後の改善を全学的な共通理解の下に進めていく上で有益に働くであろうと期待できる。